

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 268

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 5341. 俳句や和歌の形式を活用した作曲実践
- 5342. 仮眠中の印象深い知覚体験
- 5343. 充実した一日を振り返って: 先日の集中的な断食がもたらしたもの
- 5344. 12音技法の鍛錬
- 5345. 死の光: 今朝方の夢
- 5346. 批判の矢、仮眠中のビジョン、作曲スタイル
- 5347. 今朝方の夢
- 5348. フローニンゲンの新しい複合施設“Forum Groningen”と12音技法について
- 5349. 自由と解放及び音楽世界の拡張をもたらす12音技法
- 5350. 時の大いなる力
- 5351. 摂取と自己形成: 今朝方の夢
- 5352. 魂の憩いの場の創出に向けて: 静寂さと同一化し始める自己
- 5353. 内的静寂さを通じて生きること
- 5354. 静寂さと変容運動として
- 5355. 小さな美術館としての書齋の中で
- 5356. 長眠について: 創造と規則
- 5357. 今朝方の印象的な夢
- 5358. 儂さと永遠の充満する世界の中で
- 5359. 今朝方の夢
- 5360. ウェブブラウザーの変更による心の軽さ

---

## 5341. 俳句や和歌の形式を活用した作曲実践

時刻は午前11時半を迎えた。今日は午前中から雨が降ったり止んだりを繰り返している。先ほどまでかなり激しい雨が窓を打っていたが、今はすっかり雨が止み、遠くの空に太陽の姿が見える。

夕方まで天気がもち、夜からまた少しばかり雨が降るようなので、夕方にでも近所の運河沿いに軽くジョギングに出かけたいと思う。今日は特に近所のスーパーに立ち寄る必要もないので、ジョギングだけを行うことにとどめる。

昨夜改めて、俳句の「5・7・5」の形式、あるいは短歌の「5・7・5・7・7」の形式で曲を作ってみようかと思った。これまでは偶数の4小節ごとに1つのまとまりを作っていたが、それを上記のような形式に則ってまとめていこうかと思った。これにより、これまでとはおそらく違った感覚が芽生え、異なる楽想が生まれてくるのではないかと思う。そして音響的にも、これまでの偶数でまとまりを作っていた時は異なるものが生まれる可能性がある。それらは全て仮説であり、実際に実験をしてみないとわからないため、近日中にまず一度試してみて、その実験結果をもとにまた工夫を凝らしていきたいと思う。

形式を活用することは、創造性を縛ることにもつながりうるが、そうした形ではなく、むしろ創造性を発揮しやすくするための器として活用していく。そして形式自体も今後はアレンジをしていこうと考えている。「5・7・5」のそれぞれの部分に何か機能や役割のようなものがあるのだろうか。その点について調べてみて、何か作曲上に活用できそうなアイデアがあれば積極的に活用してみる。クラシック音楽などの楽譜を見ていると、やはり偶数で小節をまとめていくケースが多いが、俳句や短歌は奇数でまとまりを作っていく特徴があり、両者の差が面白い。このあたりにも、何か文化的な差があるのだろうか。

ふと、俳句の「5・7・5」を足し合わせると、17という数字が生まれ、17という数字は私にとって思い入れのある数字であることに気づいた。小学校時代にサッカークラブに所属していた時の背番号がそれであり、それ以降も17という数字には幾分思い入れがある。そうしたことも何かの偶然であり、こうした偶然が俳句への関心を醸成することにもつながっているかのようだ。高浜虚子がかつて「俳句は客観写生なり」と述べていたように、俳句を通じて、自分の内面に映った外の世界を描写することに

---

よって、内側の世界と外側の世界を一つにしていこう。内面の世界を外側の世界に滲み出させていき、外側の世界を内側の世界に招き入れていく。

再び雨が降ってきた。自宅の上空を覆う雲はどんよりとしている。一方、遠くの空は黄色く輝いている。両者のコントラストを眺めながらぼんやりとしてみる。

今朝方、表現することに制約を設けずに、まるでフリーライティングを行うかのように、内的感覚をさっと掴み、それを瞬時に音の形にする訓練をしていこうと思った。音を意識的に選び出し、意識的にそれを構築していく鍛錬と合わせて、自由連想的に出てきたものを素早く音にしていく鍛錬の双方を行っていく。それら二つの鍛錬を続けていくことにより、いつか自由自在に内的感覚を音で表現できるようになったら、それはどれだけ喜びと楽しさをもたらしてくれるだろうか。その喜びと楽しさを想像するだけで胸が躍る。フローニンゲン:2019/12/14(土)11:42

#### 5342. 仮眠中の印象深い知覚体験

つい今し方仮眠から目覚めた。今朝は午前2時前に起床していたこともあり、仮眠を取ることで随分とリフレッシュされたように思う。これから夕方、そして夜にかけての取り組みもまた集中して行えるだろう。

先ほどの仮眠中には印象的なビジョンを見た。それはとても平穏な平原風景であり、そこで私の全存在は完全なまでにくつろいでいた。そこにはくつろぎと平原を駆け抜ける微風しかなかった。しばらくそのビジョンの中に浸っていると、ビジョンはゆっくりと消えていった。いや、その前に、海岸沿いに二棟のマンションを見ていたことを思い出した。どうやらそのうちの一つは自分が住んでいるマンションであり、少し離れた場所にもう一棟別のマンションがあった。それは海岸の松林に面して立っていて、マンションからは海を眺めることができるようだった。

マンションを仰ぎ見た時、夏を思わせる太陽がそこにあり、暖かい太陽の光を感じていた。それらの二つのビジョンがゆっくりと消えた後、どこからともなく音楽が聞こえてきた。仮眠中の私の意識もそれを音楽だとはっきりと認識していたのだが、あまりの美しさに心底驚いてしまった。それはチベットかアマゾンの音楽であり、男性の声が響き渡っていた。どうやらそれは伝統的な歌曲のようであり、それを聞いている私の全身は黄金色の電流のようなエネルギーに包まれ、そのエネルギーが全身

---

を駆け巡っていた。最終的には、そのエネルギーは脳に凝集されていき、意識が変容していくのを強く実感した。そうした知覚体験がしばらく続いたのち、静けさがやってきて、しばらくしてから仮眠から目覚めた。

最近、こうした知覚体験が生じるパターンを掴み始めている。起床する時間が午前2時前後であり、なおかつ午前中に活動に没頭している場合において、その体験を仮眠の最中に整理し、過去の体験と統合しようとする際に、どこか不思議な知覚体験をするようだ。大学時代からこうしたパターンがあることに薄々気づいていたが、それはもう確信めいたものになっている。今後午前2時前後に起床し、午前中に活動に没頭した後に仮眠を取った際に、ビジョンや聴覚現象を伴う知覚体験をするのかを観察してみようと思う。

それにしても、先ほどの仮眠中に聞こえてきた歌声と、それによってもたらされた意識の変容および身体現象は印象に残るものであった。こうした体験そのものを作曲の題材にしたいぐらいである。仮に直接的にそれを題材にせずとも、おそらく今から作る曲の中に、先ほどの仮眠中の知覚体験が静かに滲み出ていくのだと思う。

一つ一つの知識と技術を、運搬・運用に足る形に体系化していくこと。それらの体系を束ねる原理を作り、その原理に身を委ねていくこと。それは作曲上においてとりわけ大切にしていきたいことであるが、結局それは他の全ての実践領域において求められることだ、ということ昨日考えていた。とにかく今は、作曲において点としての知識と技術を一つずつ獲得していき、それらの相互関係を把握し、それらの点を結び合わせていくことを意識していこう。そうした地道な実践の継続が、いつか一つの体系(システム)となり、それら複数の体系が一つの原理に昇華されていくだろう。フローニンゲン:2019/12/14(土)14:17

#### 5343. 充実した一日を振り返って:先日の集中的な断食がもたらしたもの

時刻は午後の7時を迎えた。今日一日を振り返ってみると、大変充実した一日であったことがわかる。季節の進行とともに、自分の人生がより充実したものに向かって日々進んでいることを実感する。歳をとっていくことの意義というのはこのあたりで見出すことができるかもしれない。歳を取るといふのは、単に老いていくというのでは決してなく、本来は歳を重ねると同じだけ人生が深まってい

---

くことを意味しており、老いるというよりもむしろそれによって人生に輝きが増すようなものなのだと実感するようになっている。

今日は合計で11曲ほど俳句的な曲を作り、日記についてはこれを含めて5回ほど綴っていた。そして、いよいよ来週の金曜日から始まるオンラインゼミナールに向けて音声ファイルを作成するなど、創造活動に没頭するような一日であった。それに加えて、600ページ近くに及ぶションバーグの“Style& Idea: Selected Writing”を本日読み終えた。この書籍から得るものは非常に多く、それほど時間を空けずに再読をしようと思う。今夜は、昨日届いたアントン・ウェバーンの楽譜の前半部分に掲載されている資料を読んでいき、「禅の作曲家」佐藤慶次郎氏に関する和書を読み進めていこうと思う。

今朝の起床は午前2時だったが、夕食後のこの時間帯を迎えても、驚くほどに集中力がある。14日間の断食を経て、本当に私の身体は生まれ変わったのだと思う。身体のみならず、脳内、及び精神のデトックスが相当に行われ、それが今このように明瞭なマインドを保っていることにつながっているのだろう。それと単純に、夕食時に水分を摂取することを控え、それによって消化液が薄まることなく、食べ物の消化がより速やかになっていることも考えられるかもしれない。

夕食時に水分を摂らないことによって、夕食の消化が促され、寝ている間にはほとんど消化にエネルギーを使わないことが早起きにつながっているように思う。午前2時や3時に起床することが当たり前となり、それくらいの時間に起きても午後の仮眠を挟めば、夜の就寝までほとんど同じくらいの集中力を一定に発揮できていることは自分でも驚く。

ヴェネチア旅行から帰ってきてすぐに14日間の断食を行って本当に良かったと思う。年末年始にマルタ共和国とミラノに旅行に出かけ、旅から帰ってきたときにも短めの断食を行おうかと思う。それは1日程度のものかもしれないし、3日程度のものかもしれない。今後は旅に出かけ、旅から戻って来る都度に短い断食を行い、定期的に内臓器官を休め、自然治癒力を高めていこうと思う。

昨日ふと、やはり毎日少しずつでいいのでバッハの音楽を参考にして曲を作っていこうと改めて思った。以前より、バッハに惹きつけられる何かがずっと自分の中にあり続けている。また、大抵の過去の偉大な作曲家がバッハに範を求め、バッハを通っていることの意味について考える。そして

---

何より、バッハに向かう自分について考える。この点についてはまだ未知であり、全く言葉にならないのだが、直感的かつ感覚的にバッハと何か深いつながりのようなものがありそうなのだ。そのようなことを思わせてくる夜だ。フローニンゲン:2019/12/14(土)19:26

#### 5344. 12音技法の鍛錬

時刻は午前4時を迎えた。今朝はちょうど3時を迎えたところで起床したので、起床から1時間ほど経ったことになる。今日もまた良質な睡眠を取ることができ、目覚めは非常にすっきりとしたものだった。日曜日の本日も、自分の取り組みに集中し、没入することができるだろうと期待される。昨日に、今週の金曜日からいよいよ開催されるゼミナールの音声ファイルを作った。

昨日の段階で、事前にいただいている質問の全てに答える形で音声ファイルを作り終えたので、今日は音声ファイルを作成する必要はないだろう。その代わりに今日は午後に、ある一つの協働プロジェクトに関する資料のレビューを行おうと思う。そうした仕事に加えて、その他の時間は旺盛な創造活動と読書に充てていきたいと思う。このように日々を自らの取り組みに邁進する形で過ごしていると、いつの間にか時が流れていく。

2019年最後の月も、気がつけば折り返し地点を迎えた。それはまた、あと2週間ほどすればマルタ共和国へ旅に出かけることを意味している。年末のマルタ共和国への旅に向けて、今日からもまた一步一步を積み重ねていこうと思う。

ここ最近では、意識的に12音技法を活用した作曲実践を行っている。先月から今にかけて、教会旋法、対位法、フーガの技法を活用した作曲実践を行っており、それらの技法に付け加える形で12音技法を改めて鍛錬をし始めている。以前に12音技法を活用して作曲をしていたときには、この技法の持つ魅力に気がつくことはほとんどできず、継続してその鍛錬をしていなかったのだが、ここに来て種々の魅力に気づき、今はできるだけ毎日1、2曲はこの技法を用いた曲を作るようにしている。端的には、12音技法を用いることによって、その他の手法にはない音楽世界を表現できるということが最大の魅力である。それはすなわち、他の技法では決して表現できない自己の内面領域を表現できるということを意味している。

---

作曲においてはそれこそ多種多様な技法が存在しているのだが、それらは全て表現の手段なのであって、決して目的なのではない。そして表現の手段が異なれば、それによって開示される表現領域が異なるということにも着目し、自分の作曲の幅を広げ、内面領域を様々な方法で表現していくために、12音技法をまた少しずつ探究し始めた。今日もまたこの技法を使って数曲ほど曲を作ってみようと思う。

アントン・ウェバーンやヨーゼフ・マティアス・ハウアーが12音技法を活用した曲の楽譜を眺めてみると、彼らはうまく複数の音を縦に配置し、印象的な響きを持つ和音のような音響体を組織している点に注目した。今、これと同様のことを行うことを意識した取り組みを行っている。今後は、12音を活用したフーガなどを作ってみるのも面白いかと思っていたら、それはすでにショーンバーグやメシアンが行っていたようなので、彼らの楽譜をまた調べてみようかと思う。

先日購入したハウアーに関する書籍が届いたら、彼がどのようにして霊的な世界とつながるような曲を生み出していったのかを探究していく。個人的な感情や感覚を超えて普遍的なものに向かっている曲。出発点は個人的なものだが、それが霊的な世界とのつながりを生むような曲。そうした曲を作っていきたい。作曲においては知識と技術の習得に向けて絶え間まい探究と実践を行い、それに加えて、靈感を涵養していくことも決して忘れてはならないことである。フローニンゲン:2019/12/15(日)04:21

#### 5345. 死の光:今朝方の夢

時刻は午前4時半を迎えようとしている。先ほど一つ日記を書いた後に、大麦若葉とソイプロテインを組み合わせたドリンクを作った。今はその暖かい飲み物を飲んでいる。その飲み物を作っている最中に改めて、人生の終わりのことについて考えていた。おそらく欧州で生活を始めて2年目あたりからだろうか、それぐらいの時期から突如として、自分の人生には終わりがあるという当たり前のことを強く自覚するようになり、死というものへの意識が高まった。そうした意識の高まりをきっかけにして、死という現象ないしは体験というものについて探究を始めることになり、今に至る。

自分の人生の終わりを意識することは、とりわけ米国での4年間の生活においてはほとんどなかったように思う。もちろん、友人の中で、死と意識について探究している人がいて、彼の研究に触発さ



---

れる形で死について関心を示す自分はいたが、今のように明瞭かつ自覚的な意識で自らの死を考  
えることはあまりなかったように思われる。

死という終わりから人生を放射すること。死という光の体験を起点にして、そこからそこに向かう全過  
程を死の光で照らしていくこと。死の光に照らし出されたものを発見し、それと触れ合い、それを味  
わいながら生きる日々が自ずから実現され始めている。

この現象は自分にとっても新しく、それが持つ意味はもっと深いものがあるのだと思われる。その意  
味を焦ることなく紐解いていこう。そしてその意味をさらに豊かなものにしていこう。そうすれば、人  
生の終焉に向けた過程がまた意味と意義に満ち溢れた豊かなものになるであろう。

それでは早朝の作曲実践に入る前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。偶然ながら、昨  
日、オンラインゼミナールのための音声ファイルのテーマも夢日記やドリームワークに関するもの  
だった。そこで随分と多くの説明をし、改めてシャドーワークとしての夢日記やドリームワークの意義  
を感じる自分がいた。

夢の中で私は、現在住んでいるフローニンゲンの自宅付近を散歩していた。見慣れた景色の中、  
運河沿いをゆっくり歩いていると、普段よく足を運ぶ近所のスーパーの近くまでやってきた。すると  
突然、雨が振り出し、瞬く間に運河の水が増水し、道は水浸しとなった。そこからさらに雨は激しくな  
り、見る見るうちに道は水の下に埋もれていってしまった。まだ散歩を楽しみたいと思っていた私  
は、困ってしまい、どうしようかと考えていた。

すると、運河をかける橋の上に、小中学校時代の友人(KM)が歩いている姿が目に入った。そこで  
私は彼に話しかけるために、橋の方に行こうとしたのだが、もう道の上を歩くことは不可能なぐら  
いに浸水していたため、橋の上まで飛んでいくことにした。

橋の中腹に着地し、彼に声を掛けると、「飛んできたんだね」とびっくりしたような表情を彼は浮かべ  
た。そして、「飛んでいる姿を人に見せても大丈夫？」と彼が述べたので、「もうこうした状況であれ  
ば平気さ」と私は述べた。彼もまた空を飛べることを私は知っていたので、そこから私たちは、浸水  
仕切った道の上を飛んで移動することにした。すると途中で、浸水した道の上をボートか何かに

---

乗って移動している白人の男性がいて、彼の頭の上を通り過ぎていったとき、彼は驚いた表情を浮かべていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は小中高時代の友人(SS)の家に行った。彼の部屋で話をしていると、彼は私の影響で、水彩色鉛筆を購入したようだった。それを用いて毎日何かの絵を描いているそうだった。するとそこで、彼の母親が部屋にやってきて、彼が今、色鉛筆の魅力を伝えるための活動に従事していることを教えてくれた。何やら色鉛筆の良さを伝えるためのオリジナルステッカーを作り、それを2人で街中で配っているそうだった。ステッカーを見せてもらおうと、そこには可愛いキャラクターが描かれていた。とても微笑ましい気持ちになったところで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は小中学校時代の親友(HS)と一緒にお互いの似顔絵を描いていた。厳密には、私の横にはもう1人友人(YU)がいて、彼もまた親友の似顔絵を描いていた。3人で和気藹々と話しながら似顔絵を描いていると、あるところで無事に描き終えた。3人でお互いの絵を見せ合い、そこでもまた和気藹々とした会話がなされた。

最後に、お互いが誰の顔を描いたのかを記録しておくために、相手の名前を入れておこうということになった。私は親友のフルネームを漢字で書き、最後に「君」という文字を付けた。普段はニックネームで彼のことを読んでいたのだが、なぜかそのときには姓名の後に君をつける形を取った。すると、私の横にいた友人が、フルネームを漢字で書くと、それが誰かが特定されてしまいあまり良くないのではないかと述べた。私は逆に、誰を描いたのかわからない方が問題なのではないかと思ったし、絵に相手の名前を入れることもまた何かしらの表現であると考えれば、それもまた自由に作り手に委ねられることなのではないかと思った。

なぜだかその友人はその細かな点に執着しており、向こう側にいたまた別の2人の友人(TK & AF)にその点を確認していた。そんな些細なことに執着し、いちいち別の友人に尋ねなくてもいいと私は思った。そこで私は、友人が身を投げ出す形で向こう側にいた2人の友人に質問をしていたのを見て、彼のお尻に思いっきり鉛筆を突き刺した。最初私は彼の肛門に鉛筆を突き刺してやろうかと考えたが、それは相当に残酷であると思ったので、代わりに臀部に鉛筆を突き刺すことにした。思いっきり突き刺したつもりだったが、彼のズボンが硬く、彼はそれほど痛がる様子を見せず、ただし随分と驚いた表情を浮かべていた。フローニンゲン:2019/12/15(日)04:56

時刻は午後4時を迎えようとしている。今、書斎の目の前を数羽のカモメが横切って行った。すると、再び彼らがまた近くにやってきた。空を優雅に旋回する彼らの姿をぼんやりと眺める。

今日は天気の変化が激しく、雨が降ったり止んだりしている。ちょうど先ほどは雨が止んだので、そのタイミングを見計らって、軽くジョギングしながら近所のスーパーに行ってきた。帰り際にまた雲行きが怪しくなり始め、これから再度雨が降るようだ。

スーパーに向かう最中に、アイルランドの詩人オスカー・ワイルドのある言葉について考えていた。その言葉と発達の原理である健全な自己批判との関係から、しばしば自分が熱気を持って何かを語る際には、そこに過去の自分に対する自己批判の衝動が含まれていることに気づかされた。何かに対して批判の矢を向ける時には、往々にしてそれは過去の自分に対する批判の矢となって現れ、それは過去の自分から完全に脱却しようとする行為のように思えてくる。そうしたことを考えさせられる出来事がここ最近あった。そうしたことを考えながらスーパーに立ち寄った。

午後に仮眠を取っている最中、北欧の森の中の一軒家がビジョンとして現れた。それは湖畔にあり、木材できたお洒落な小屋のように見えた。そこで私は、自分にとって大切な人と一緒に、日本の懐かしのクリスマスソングを聞いていた。その時の時刻は夜であり、家の周りは静寂さに包まれており、家の中は幸福感で満たされていた。そして、自分の心の中もまた幸福感で満たされていた。そのようなビジョンがあった。

午前中に、ストラヴィンスキーが執筆した“Poetics of Music in the Form of Six Lessons”を読み進めていた時に、作曲に関していくつかのアイデアが芽生えた。聴き手が一瞬立ち止まって、そこから何かを感じ取ってもらえるような曲。自分の内側の感覚に対して共感してもらうことが目的なわけでは決してないが、その場で一瞬立ち止まるようなきっかけを与えるような曲を作りたい。そして、聴き手自身が自分の内的な感覚と向き合ってもらい、自分自身の内的時間を経験できるような曲を作りたい。そうした触媒になるような短い曲を作りたいという静かな思いが立ち現れていた。

---

そこから私は、作曲のスタイル(様式)について考えていた。作曲のスタイルを衣服のスタイルと見立てた場合に、場所に応じてスーツを着たり、和服を着たりするように、場にふさわしいスタイルというものが作曲スタイルにもありそうだ。いや、スーツを好む人はスーツ一辺倒かもしれないし、和服の場合もまたそうである。衣服のスタイルと同様に、作曲スタイルには作曲家の好みが見られ、衣服の鑑賞者にも好みがあるように、音楽の聞き手にもスタイル上の好みがある。当然ながらある。

同時に2つの服を着ることはできないのと同じように、作曲においても異なるスタイルを同時に適用することはできない。基本的には一つの曲は一つのスタイルで書かれる。あるいは、作曲家の個性が育まれ、自分独自の書法が確立されていけばいくほどに、スタイルはある統一的な唯一性を持つものになっていく。そうなってくると、どの曲もその一つのスタイルで書かれることになるから、当然ながらそれを好む人と好まない人に別れてくる。好みの作曲家が異なるというのは当然であり、万民が好む作曲家というのは本質的には存在しないのだと思う。もし仮に万民から愛されるような作曲家がいたとしたら、それは独自の作曲書法を確立していない偽物か、作曲上の神か仏なのだろう。フローニンゲン:2019/12/15(日)16:07

#### 5347. 今朝方の夢

時刻は午前3時半を迎えようとしている。今朝は午前2時半過ぎに起床した。相変わらず、早朝から調子が良い。睡眠の質は高く、それでいて睡眠の時間は短い。睡眠の時間が短くなっているのは、おそらく睡眠の質が高まったからだと思われ、そうした睡眠の質の高まりをもたらしたのは断食による身体の変化なのかもしれないと思う。それとその他には、日中の過ごし方なども影響しているかもしれない。

何をどれだけどのように食べるのかということや、朝から晩まで自分の取り組みに没頭すること、そしてできるだけ人との接触を避けて人疲れしないようにすることなども睡眠の質に影響を与えていることかと思われる。こうした関係性は一方的なものではなく、睡眠の質がそれらの活動やあり方などにも影響を与えていることを忘れてはならない。

今日は午前中に2件ほど、オンラインミーティングと協働プロジェクトの一つであるプログラムに関する仕事があるため、それまでの時間に自分の取り組みを前に進めていこうと思う。その前に、今朝方

---

の夢について簡単に振り返っておきたい。夢の中で私は、オランダのどこかの地方都市にいた。その街の中央駅周辺を歩いていると、そこで偶然に、先日オランダリーグに復帰したサッカー選手 (KH) と出会った。どうやら私たちは知り合いのようであり、そこで偶然の再会を祝った。その選手は最近書籍を出版したようであり、本人がそれを持参していたので、それを見せてもらうことにした。過去にその選手が出版した書籍については、2人の仲もあって、私はそれらの書籍を全て購入して読んでいた。いずれの書籍もその選手の思想が色濃く出ていて興味深いと思っていたのだが、手渡された書籍のページをめくってみると、今回の書籍の方がより面白い内容であるとその場で分かった。そこで私は、その方に書籍の内容について色々と質問をさせてもらうことにした。

ちょうど2人の目的地が同じだったので、駅からそこへ向かう途中、歩きながら色々と質問をさせてもらった。一つ一つの質問に対して、その選手は、「いや～、その質問は面白いですね。今までそんなこと聞かれたことがありませんでした」ということを述べてくれ、話が盛り上がった。

目的地までの道中、絶えず書籍に関する質問をさせてもらい、その方からの回答に対して、自分も色々と考えることがあった。歩道を歩いていると、あるところで、その選手が思っていた以上に背が高いことに気づき、その気づきが芽生えた時に夢の場面が変わった。今朝方はそのような夢を見ていた。

現実世界においてはその選手と面識はないのだが、過去の夢の中でも何回かその選手が登場している。お互いに歳が近いこともあり、また仕事は違えど、国の外で活動を続けていることもあってか、夢の中で出会うたびに話が盛り上がる。今朝方の夢においてもそうであった。今朝方の夢の中で、自分のシャドーの何が投影されているのかはよくわからない。そこにはあまり否定的なシャドーはないように思われる。

それでは、今から早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日の午前中のミーティングの開始は午前8時半からと少し早いですが、それまで5時間ほど時間があるので、その間はほぼ全て作曲実践に時間を充てようと思う。いつものように、早朝の作曲実践は準備運動的な作曲から始める。一日を始める際にも、先ほど準備運動がてら日記を書いたように、難しくない課題から実践を始め、そこから少しずつギアを入れていくことが、自分の取り組みに没頭するための儀式的な行為なのだと思ふと気づく。易しい課題から取り組みを始め、実践を行うことに伴う快樂に浸ること。快樂の中で実践を継続させ

---

ていくこと。そうしたサイクルを醸成することを今後はより意識的に行ってみようと思う。フローニンゲン:2019/12/16(月)03:47

#### 5348. フローニンゲンの新しい複合施設“Forum Groningen”と12音技法について

時刻は午後の2時半を迎えた。今朝は午前2時半に起床していたこともあり、そこから今に至るまで随分と様々な活動に従事していたように思う。ある企業の方々とのオンラインミーティングを1件行い、そこから他の協働プロジェクトに関する仕事を一つ行って今に至る。

幸いにも今日は、昨日の天気予報から修正がなされ、雨はまだ一度も降っていない。雨が降るのは今日の夜からとのことなので、この日記を書き留めたら、街の中心部のオーガニックスーパーにジョギングがてら立ち寄ろうかと思う。そのついでに、フローニンゲンの市が何年にもわたって建設を重ねてようやく完成した複合施設“Forum Groningen”を遠くから眺めてこようかと思う。

先日、友人かつかかりつけのメルヴィンにその施設のオープンを教えてもらった。それは街のシンボルであるマルティニ教会の近くにあり、私も街の中心部にはよく行くのだが、そのような施設が建設されたことを知らず、完全に盲点となっていたようだ。また、ちょうど数日前に、デン・ハーグに住む日本人の友人からメールがあり、その施設について偶然ながら言及されていた。フローニンゲンに住む私が知らないことを知っていて驚いたのだが、かなり大きな複合施設であり、デザインも凝っているとのことなので、オランダ中の人知っていることなのかもしれない。この施設には、映画館やレストランのみならず、立派な図書館やワーキングスペースまであるそうだ。この施設だけで娯楽から仕事まで完結してしまうことをコンセプトに作られたのかもしれない。

まだ実物を見たわけでもなく、中に入ってみたわけでもないのになんとも言えないが、デザイン性にすぐれ、施設内には植物などを配しているようであるから、市民の憩いの場としての機能も担うように設計されたのではないかと思う。年末年始は色々と予定が入っているため難しいかもしれないが、うまく時間を作ることができたら、久しぶりに映画でも見に、この施設を訪れてみようかと思う。

今日はこれまでのところ、8曲ほど俳句的な曲を作っていた。買い物から帰ってきてからもまた作曲実践に打ち込みたい。オンラインミーティングが始まる前には、12音技法を用いた作曲をしており、買い物から帰ってきてからは、教会旋法を活用した作曲をしようかと思う。12音技法は、すべての音

---

---

を平等に扱うところに魅力の一つがあるが、一方で作曲の困難性もそこにあるように思える。つまり、平等を尊重することによって、一つ一つの音の個性が平均化されてしまう恐れがあるのだ。

ある音と別の音の間に主従関係を作らずに、各音の個性を際立たせていくような工夫をしていきたい。一つ一つの個性を最大限に発揮させ、それを一つのまとまりのある曲の形にしていくことにこの技法の醍醐味がある。

全ての音が協力し、相互に影響を与える形で一つの全体を生み出していく。それは12個の音を使ってコスモスを生み出すことを意味する。今の私はまだカオスしか生み出せていない。コスモスを生み出すことへ向けて、毎日1、2曲はこの技法を使って曲を作っていく実践をこのところ続けている。12音技法の創始者であるショーンバーグは最後まで厳格に規則を守ってこの技法を使っていたそうだが、彼の弟子のウェバーンやバークは、もっと柔軟にこの技法を活用したそうだ。彼らがどのようにこの技法を活用して曲を作っていたのかを参考に見よう。フローニンゲン:2019/12/16(月)14:49

#### 5349. 自由と解放及び音楽世界の拡張をもたらす12音技法

少しばかり考えを改め、今日街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に行くのではなく、明日にしようと思った。特に今すぐに必要なものはなく、もう数日したら切れそうになっている食品がいくつかあるだけなので、明日に買い物に行けば十分に事足りる。何より、今は幾分どんよりとした雲が空を覆っており、明日は晴れとのことであるから、太陽の光が降り注ぐ中に買い物に出かけた方が気分が良いだろうと思われたからである。もちろん今日も、夕方あたりに気分転換にジョギング兼ウォーキングに出かける。近場の運河沿いに出かけていくのは少しばかり作曲をしてからにしよう。

先ほど、12音技法についてメモ書きを書き留めていた。改めてその技法の意義について考えてみると、ショーンバーグは、調性システムの崩壊を実感する中でこの手法を生み出し、それは既存の和声理論によって制限を受けていた一つ一つの声部に自由を与え、それらを解放した。

自由と解放というのは、音楽上のみならず、人間発達や生そのものに関して私の中でテーマとして掲げているものなので、ショーンバーグの思想には共感するものがあり、それを新たな音楽システムの構築につなげた点に感銘を受ける。この技法の誕生によって自由を与えられ、救い出された各

---

声部は、再び他の声部との関係性を既存の和声法にはない形で作り出し、それが私たちの音楽世界を拡張させることにつながったのだと思われる。実際に、この技法で作られた曲を聴いてみたり、何より自分でこの技法を用いて作曲を行うと、不思議と聴覚範囲の拡張がなされたように感じるのである。

聴覚が変容し、これまでには聴き取れなかった音楽世界が認識し始めると言えばいいだろうか。12音技法で作られた曲は、とかく難解だと言われがちであるが、それは私たちの聴覚変容をもたらし、それによって、捉えられる音楽世界が拡張され、私たちの現実認識の範囲までも拡張させてくれる働きをしているのだと思われる。

その他に考えていたこととしては、数学の問題を自分で作問し、自らそれを解くようなことをしているのが普段の作曲実践のあり方のように思える、というものだった。自ら問題を創造し、その問題の解決策を自分で創造し、問題を解決していく喜びと楽しさがある。しかもそれは単純に問題を作ったり、解いたりすることを超えて、生きることに根付いた魂の躍動が形となるという芸術性も内包されている。

問題を作ること、解決策を作ること、形を作ること。それらの「作る」という行為が全て、一つの「創る」という行為に昇華されていく。それが作曲実践であり、そこに作曲実践の楽しさや醍醐味のようなものがある。それでは今から少しばかり作曲実践を行い、その後気分転換に、近所の運河沿いにジョギングに出かけたいと思う。フローニンゲン:2019/12/16(月) 15:06

### 5350. 時の大いなる力

時刻はちょうど午前3時を迎えた。とても静かな闇の世界が目の前に広がっている。それは自分の心を心底落ち着かせてくれる。そして、最大のくつろぎをもたらす。

闇とはもうすっかり親友関係を築けたようだ。こうした関係を築くことができるととても嬉しく思う。この関係が築き上げられるまでに4年ほどの時間がかかった。それは「4年も」という表現もできるかもしれないが、「わずか4年で」という風に表現することもできるかもしれない。とにかく、焦らずに時間をかけてゆっくりと育ててきた関係がここにある。時の発酵過程にさらした真の関係性がここにある。



---

私たちは生きていく中で種々の課題や葛藤を抱えるが、それらの多くは、時の発酵過程の中に晒されて初めて解決されていくものなのかもしれないと思う。時の持つ力は偉大である。そしてこの時の力というのも、結局は自分の内側の力であることを忘れてはならない。晒す時間というのは外的な時間ではなく、自分の内側の内的な時間であるからそうしたことが言える。私たちの内面領域の持つ広さと深さには、ただただ驚かされてしまう。時の持つ力に関してもそうだ。

今朝目覚める時、「しまった、10時間以上寝てしまった！」と思った。10時間ぐらい眠った時に得られるような、心身の全快感、極度な回復感を味わっている自分がそこにいた。だが時計を確認してみると、午前2時過ぎであり、昨夜の就寝が午後10時前であったことを考えると、10時間どころか、その半分の5時間も眠っていなかった。目覚めの良さが驚くほどだったので、そこで起床することにした。それ以上眠ると寝過ぎであり、まさに惰眠を貪ってしまうと思ったからである。

自分の身体はやはり完全に生まれ変わったようだ。この間の14日間の断食を通じて間違いなく新たな身体に生まれ変わった。内臓の機能が本来の力を取り戻し、消化も以前よりも速やかになされるようになり、それに付随して栄養の摂取力のようなものも上がっているように感じる。良質なものを少量摂取する生活をこれからも心がけていこう。

こうして午前2時過ぎに起床してみると、1日は本当に充実感と幸福感に包まれたものになる。自分の取り組みに十全に没頭できること。しかもそれを自分の心ゆくまで長く味わえることほど大きな喜びはない。もはや喜びが喜びに溶解してしまうほどの喜びがここにある。

今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがある。気がつけば、再来週の今日は、マルタ共和国に向けての出発する日だ。年末年始の旅行を楽しみに、今日もまた自分の取り組みを前に少しばかり進めようと思う。とにかく今日も素晴らしい1日になる絶対的な予感がある。フローニンゲン：  
2019/12/17(火)03:17

### 5351. 摂取と自己形成:今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前3時半に向かっている。先ほど、チアシードを入れた小麦若葉ドリンクを飲み終え、今はソイプロテインを白湯に溶かし、そこに大麦若葉を入れたドリンクを味わいながら飲んでいる。

---

昨日は寝室の気温が高かったのか、それとも湯たんぽを最後まで足元あたりに入れておいたためなのか、起床した時に随分と寝汗をかいていた。失われた水分を補給するかのように、先ほどの飲み物と今飲んでる飲み物が体に染み渡っていくのを感じる。この感覚を大切にしよう。

体に取り入れるものを味わう感覚。そしてそれがまさに自分を構成していくというその感覚を味わおう。食べるものは本当にその人を作る。それは目に見える物質的な食べ物だけに限った話ではないのかもしれない。まさに情報に関してもそうだろう。書籍に関してもそうだ。何を知性の養分とするかによって、その人の知性は作られていく。自我の構成についても考えてみると、文化や環境からのフィードバックは極めて大きい。どこの国のどのような環境に住むのかが、その人の自己形成において大きな影響を及ぼすということは言わずもがなかもしれない。

それでは、今日も今朝方の夢について振り返り、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。午前10時から行われるオンラインミーティングまでまだ6時間半ほどの時間があるため、そのミーティングを迎えるまでに集中して作曲実践や読書に取り掛かれれば、その日に取り組みたいことの大半、ないし全ては午前中で達成できてしまいそうだ。とにかく一つ一つの取り組みに集中していこう。

夢の中で私は、どこか地元を思わせるような場所にいた。地元にある小さな山のウォーキングロードを歩いている自分がそこにいた。しばらく山道を歩いていると、ある時、広々としたスペースに出くわした。そこでは何人かの見知らぬ人たちが楽しげにダンスを踊っていた。

彼らの踊りを見ていると、とても楽しそうであったが、私はそのまま彼らの目の前を素通りしようと思った。すると、1人の女性に呼び止められ、私は彼女と少しばかりダンスを踊ることになった。その女性は日本人なのだが、183cmぐらいの身長があり、爪先立ちできるようなシューズを履いていたため、さらに背が高く思えた。私はダンスの経験がないので、その女性の手ほどきを受けながら、彼女の誘導に従う形でダンスを踊った。踊り始めてみると、ことのほか面白く、いつまでも踊りを踊っていたという感覚になった。だがしばらくすると、そうした思いとは裏腹に、突如夢の場面が変わった。

次の場面では、私は中学校1、2年生の時に担任を努めてくださった先生と話をしていた。何の話か忘れてしまったが、学校生活の話か進路に関する話だったかと思う。先生との話を終えた後、そのまま先生の英語の授業を受けることになった。先生は少し口下手なところがあり、それが授業の中

---

にも現れていた。最初の数分間ほど先生の授業を聞いたところで、そこからもう授業を聞くのはやめて、自分の空想世界の中に浸ることにした。そしてその中で楽しみながら自分の考えたいことを考え、自分の学びたいことを学ぶことを行っていた。

しばらくして我に帰ると、私は大きな畳部屋にいた。見ると、そこには小中学校時代の男女の友人の多くが綺麗な列をいくつかなして、全員正座で座っていた。彼らと対面する形で座っていたのは、1人の女性友達(NI)だった。どういうわけか、彼女と私は結婚したばかりのようであり、彼女はみんなの前で新婚生活について語っていた。最後の方で、就寝時間に関する話があり、話の内容としては、下に住んでいる人が寝てから就寝するというようなことを述べていたのだが、彼女の日本語がいまいちわからない箇所があり、それは自分だけではなく、横に座っている友人にとってもそのようだった。彼女が述べたよくわからない日本語の意味について考え始めたところで夢から覚めた。

フローニンゲン:2019/12/17(火)03:44

#### 5352. 魂の憩いの場の創出に向けて: 静寂と同一化し始める自己

—明瞭に語られた言葉は死ぬことがない—エミリー・ディキンソン

時刻は午後4時を迎えた。つい今し方、街の中心部のオーガニックスーパーから自宅に戻ってきたところである。ここ最近は何度も雨が降ることが多く、雨の温もりのおかげか、それほど寒くない日が続いている。今日は最高気温がなんと12度ほどもあり、先ほどジョギングがてらスーパーに向かっていると、少し汗をかくほどであった。おそらくもう少しばかりの気温の日々が続き、年末あたりからぐっと冷え込んでくるだろう。寒さの観点で言えば、そこからがフローニンゲンの本格的な冬の始まりだと言えるかもしれない。

スーパーからの帰り道、アイルランドの詩人ウィリアム・イェイツが詩作を通じて、自他の魂の憩いの場を作ろうとしていたことに思いを馳せていた。それは自分の作曲の意図と全く同じである。作曲実践を通じて、日々自らの魂が治癒され、安らかになっていくのを感じる。魂が徐々に変容を遂げていき、もちろんそれに伴って新たな課題に直面するのだが、そうした課題もまた曲を作るという行為そのものと、生み出された曲による治癒と変容作用とによって、それらの課題が徐々に乗り越えられていく。そのようなことを実感している日々であり、こうした現象が自分の中だけで起こるのではなく、

---

イェイツが考えていたように、他者の中でも起こるようにしていくのか創造活動に営む者が果たすべき役割なのかもしれないと思う。今日もこれまでのところ、9曲ほど曲を作った。入浴と夕食の準備に向けてまだ時間があるので、もう1つか2つほど短い曲を作れそうだ。

今朝方にふと、作曲にはやはり英作文を作るような楽しさがあることを改めて発見した。中学校や高校時代を振り返ってみると、英作文を作ることが好きな自分が確かに存在していて、それが今もお自分の中に生き続けていることを感じる。

作曲にせよ英作文にせよ、それらはどちらも共通して“composition”という言葉が当てられるのはいづれも。その単語をじっと眺めていると、文字が並び替えられ、“cosmos”という単語が想起された。言葉を生み出していく作文と、音を生み出していく作曲は、もしかするとコスモスを生み出す行為に他ならないのかもしれないと思う。あるいは、コスモスとつながり、コスモスと調和を図りながら、コスモスのさらなる創造に寄与していくことなのかもしれない。

静かな気持ちの中、夕方のこの時間帯に日記を綴れる幸福。最近、自己が静寂さに包まれるというよりも、自己が静寂さそのものに変化し始めているのを実感する。それは、これまでの欧州生活では見られなかった変化である。そうした状態の中で、自分の言葉を静かに紡ぎ出していこう。形に残した言葉や音は決して死ぬことはない。それらが静寂さと一体となった自分の魂から出てきたものでありさえすれば。フローニンゲン:2019/12/17(火) 16:15

### 5353. 内的静寂さを通じて生きること

時刻はちょうど午後の7時を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終えた。今日の夕食の量は、腹五分ぐらいだろうか。いつもそれぐらいの量の夕食を食べれば十分であり、それぐらいの量のおかげで消化にエネルギーを使う必要がなく、結果として朝早くに起床することができ、1日を通じて自分の活動に十全に打ち込むことができているのだと思う。些細なことだが、こうした少しの心掛けで、心身に変化があり、日々の充実感や幸福感が変化することを実感している。

今年の冬は、私に静けさの本質を教えてくれているのかもしれない。そのようなことを思った。夕方に街の中心部に買い物に出掛けた時、いつも以上に辺りが静かであるように感じた。それは外部環境が静かだったというよりも、自分の内側が静かだったのだと思う。

---

---

今年の冬はどういうわけか、静寂さに包まれる形で、日々のほぼ全ての時間を黙想的な意識の中で過ごしている。そしてそれは、冬の進行に応じて徐々に深まりを見せている。

諸々の制約から自己を解放させること。そうした制約は思想的なものや感覚的なものまで含めて実に数多くある。そうした制約に気づきの意識を与え、そこからの解放を実現させていくときに、そもそもそうした制約へ気付くための内面の落ち着きが必要であるように思えてくる。まさに、内面世界の湖面に波を立てないようにして、湖面に映し出される諸々の制約を見ていくのである。内面世界の湖面に波を立てないためには、兎にも角にも静寂さの中にいる必要があり、静寂さの本質を見出すことが大切かと思う。今、私は徐々にそれが見えてきている。

詩人のリルケがかつて、「バラの中の静けさ」を感じていたように、静けさを絶えず感じながら日々の生活を営んでいこう。いや、静けさを感じるというよりも、静けさと一体となった生活を実現させていこう。静けさと一体となった生活は次のステップかもしれない。そこを見据えた上で、まずは静けさを大切にしながらそれを感じていこう。

静けさを味わう生活。先ほどの夕食もまさにそうだった。今年の冬からは、静寂さがなんたるかを教えてもらっているように思う。自分の内的時間を通じて生きるだけでなく、自分の内的静寂さを通じて日々を生きること。

自分にとって大切なことはすべて、静寂さを根源にして生まれてくるものであるように思える。人間として生きることに伴う諸々の制約。現代という時代に生きることに伴う種々の制約。そうした囚われから解放されていくためには、静寂さと一体となる形で自己を見つめ、生活を営んでいくことが不可欠だ。そのようなことを気づかせてくれる夜である。そういえば今朝方にも、静寂さと関連して、フィンランドの森の中で生活をするようになったら、家の脇に作曲小屋を作ろうと思った。作曲小屋を持っていた作曲家を何人か知っているが、その中でもエドヴァルド・グリーグの作曲小屋は印象的であった。

グリーグが長く過ごし、生涯を閉じたノルウェーのベルゲンの街に行き、実際にグリーグの自宅兼博物館に足を運んだことが懐かしい。そこで見た、海を眺めることのできる作曲小屋の姿が忘れられ

---

ない。グリーグのように、いつか私も静かな環境の中で、さらに作曲小屋を作る形で、作曲を含め、自分の創造活動に日々打ち込んでいきたいと思う。

ポツポツと小雨が降り始めた。今夜は小雨が窓に当たる音を聞きながら、夜の静けさを味わおう。静けさを愛し、それを味わうことを積み重ねていくことが、絶えず内的静寂さを通じて生きることにつながるはずだ。フローニンゲン:2019/12/17(火) 19:14

### 5354. 静寂さと変容運動として

時刻は午前6時を迎えた。今朝は、心身の欲するまで睡眠を取り、起床したのは午前5時過ぎと遅かった。昨夜就寝したのは午後9時半過ぎだったことを考えると、随分と睡眠を取ったことになる。

自分の心身はそれぞれ一つの生命であり、それら二つが合わさってまた一つの全体としての生命を形作っている。そこには生命固有のリズムがあり、そのリズムに沿った形で諸々の事柄が進行していく。睡眠もその一つである。こうしたリズムへの自覚とリズムへ寄り添いながら生きていくことが徹底されている。これがもう深い次元で実現されていることを実感する。その実現に伴って、日常生活が随分と変わった。日常の世界の見え方が随分と変わった。日々を生きる質が随分と変わったのである。

ふと顔を上げると、そこには深い闇が存在している。後ほど改めて今朝方の夢について書き留めたいが、外の世界の闇の深さは、内側の闇の世界と同じぐらいに深い。何より、そこには静寂さがある。静寂さがある、そこに自己がある、静寂さと自己が一つになっている。静寂さは自己であり、自己は静寂さである。静寂さについては昨日も考えていたように思う。

今年の冬は、自分の内側の静寂さをとことん深めていこう。内外の静寂さを深く味わっていこう。それを継続させていけば、自分は静寂さになるだろう。そして、全ての静寂さが自分になるだろう。

静寂さは世界の本質である。この世界の映し鏡である。

こうして毎朝静寂さを感じていると、默想的な意識が単なる一時的な状態ではなくて、恒常的なものになっていく。今はもう、日々がこうした默想的・観想的な意識の中で過ぎていく。それによって、自

---

分がまた全く新しい自己へと変容の方向に向かっていることに気付く。今朝方起床して、ヨガをしている時にもそれを感じた。

自分は再びこれからまたどこかに向かっていく。次の変容は、これまでと同様に、いやそれまで以上に大きなものになるだろう。今の自分では全く想像できない自分がそこに待っていて、そこに向かっている自分が今ここにいる。そこへ向かう運動に抗うことはできず、自分にできることはその運動を運動として生きることである。

その運動を見守ることなどできない。なぜなら、それは見守られるような客体物ではなく、自己を通じて生きる対象としてそこにあるからである。それは本当に極度に主観的な運動なのだ。それは決して目には見えず、主体的かつ自己を超えた超主体的な運動であるがゆえに、それを通じて生きていくしか方法はないのである。

自己はどこに向かっているのだろうか。ひょっとすると、それは自己すらも知らないのかもしれない。されば、自分にわかりえようがない。

今年の冬も、様々な充実感がありそうである。今年の冬を通じて、自分はまたどこかに向かっ進んでいく。自己が深まり、人生が深まっていくことをもたらしてくれる冬が、静寂さの中で、いや静寂さとして静かに進行している。フローニンゲン:2019/12/18(水)06:16

### 5355. 小さな美術館としての書齋の中で

この静けさを思う存分に味わおう。この静けさの中に溶け出していってしまい、静寂さになってしまおう。そして、静寂さとして今日1日を生きていこう。そのようなことを思わせてくれる気分である。

今年の冬はまだ始まったばかりであり、寒さは全くもってピークを迎えていないのだが、早くもこの冬の意義を実感している。それは兎にも角にも、静寂さの本質に気づかせてくれたことと、静寂さとして生きていくことがなんたるものかを教えてくれたことである。

自己を深め、人生を深めていくためには諸々の事柄や実践が要求され、それは成熟のプロセスごとに異なる。今の私にとって必要だったのは、絶対的な静寂さだったようだ。実践としては、絶対的

---

な静寂さを味わうことと、それとして生きること。つまり、自己が絶対的な静寂さそのものとなり、この世界を静寂さとして生きていくことが要求されていたのだ。

昨夜、自分の書斎が小さな美術館であることを改め感じた。それは書斎の窓から外の世界を眺めた時、外の世界が絵画作品のように見えるというだけではなく、2枚の原画を含め、自分が所有している3枚の絵画作品と、備え付けの4、5枚の絵画作品がここにあるからである。昨夜は就寝前に、ニッサン・インゲル先生の2枚の原画をぼんやりと眺めていた。その瞬間には、確かな静寂さがあって、それら2枚の絵画は静寂さそのものであった。そして、私自身も静寂さであった。

内と外、そして外の対象物の三者が共に静寂さとなり、それらが一つの巨大な静寂さになるという瞬間を体験した。この体験は一見すると何の変哲もないように思えるかもしれないが、自分にとっては極度に意味のあるものかと思われる。

静寂さ、静寂さ、静寂さ…。今も静寂さの中において、自分が静寂である。

副詞の“in”を置く形ではなく、状態を表す形容詞としての静寂なありようが自己そのものになっている。副詞を活用した瞬間に、そこでは静寂さが名詞として捉えられてしまい、客体物になってしまう。今の自分は静寂さを名詞としては捉えていないのである。

文章を綴る際には、どうしても言語の性質として、それを客体化することになるのだが、それはそもそも客体化の範疇を超えている。完全なまでに主観的な形でそれは経験されている。絶えずそれが知覚の中にある。いや、知覚そのものが静寂さになっているのだから、その説明はあまり相応しくないかもしれない。

「自分は静寂である」という表現。自己と静寂な状態が完全にイコールで結ばれているそうした表現は、今の状態を表すにふさわしい。さらに驚くことに、それはもう状態から恒常的な構造特性へと移行し始めていることにも気付く。ある状態特性をしばらく、ないしは長らく経験していると、それが恒常的な構造へと変貌を遂げていくというのは発達原理の一つである。その原理がまさに今の自分に適用されている。



---

この文章を綴る前に何を書こうとしていたのか定かではない。そもそも、最初から意図や目的などなかったのかもしれない。書きながら何かを感じ、書きながら考えること。そして何より、書きながら生きること。自分はただそれだけのことを行っているに過ぎないのだ。

今日もまたふとした時に、小さな美術館としての書斎に飾られた絵をぼんやりと眺めよう。静寂さと観想として生きる1日が、また小さな振動と共に産声を上げようとしている。フローニンゲン:2019/12/18(水)06:41

### 5356. 長眠について:創造と規則

このところは午前2時や3時あたりに起床することが習慣となっており、今朝のように午前5時に起床すると、1日のスタートが随分と遅いもの感じられてしまう。それは別に大きな問題ではなく、そこからゆっくりと1日を始めればよいのであり、自分の取り組みにより深く集中していけばいいだけの話である。とはいえ、少しばかり睡眠について考えてみると、今朝の私の心身は、おそらくいつもより多くの睡眠を欲していた何かがあったのだらうと思われる。

人にはそれぞれ最適の睡眠時間があると言われる。それは確かにそうなのだが、その最適さも自分の成長プロセスやライフサイクル、さらには日常の心がけと実践次第で大きく変動する。それを先日の断食を通じて改めて実感した次第である。

この世界には短眠の人と長眠の人がいる。断食後、睡眠時間が減りながらも、それでいて極度に濃縮した質の高い睡眠が実現され始めた姿を見ると、そもそも極度に質の高い睡眠が実現されていれば、果たして長く眠ることなど人間にできるのだろうか、ということを考えていた。長く眠ってしまうというのは、それだけ睡眠の質が悪く、睡眠によってうまく心身の回復がなされていないことの証なのではないかと思うに至った。そして、日中の活動の中で、これまでの習慣的な行為や発想によって、知らず知らずのうちに、心身を疲弊させ、質の低い睡眠を導く状態を生み出してしまふことや、睡眠を取ってもなかなか心身が回復しない状態を生み出してしまっているのではないかと思う。要するに、長眠には長眠にならざるを得ない何かしらの問題があるようなのだ。それは前回の断食を通じて得た気づきの一つであった。

---

静寂さについてまた考えている自分がいる。朝の一杯の具なし味噌汁を作っている時にもまた静寂さについて考えていた。絶対的な静寂さの中で、絶対的な静寂さとして絶対的に動的(ダイナミック)に瞬間瞬間を生きること。そうした生き方を希求する自己がいるようだ。

少しばかり目を閉じて、心の中の声を聞いてみる。すると、そうした生き方の確からしさと正しさが感じられてくる。そして何より、心がそうした生き方に向かってゆっくりと歩いている姿が見える。

昨日、作曲上の規則について少しばかり考えていた。現在は確かに、過去の偉大な作曲家が生み出した作曲法則と、それを定式化した音楽理論家の理論に従う形で曲を作ることが多い。しかし今後は、自らで積極的に作曲上の規則を作り、それをまた積極的に破っていくということが求められるような気がした。守破離の考え方を、他者が作った規則に対してだけ適用するのではなく、自らが作った規則に対しても適用するのである。創造的に規則を作り、創造的に規則を破ること。この双方を行っていくことが今後求められることかと思われた。こうしたプロセスを何度も繰り返し行うことによって、自由自在に音を創造することができるようになってくるだろう。この果てしないプロセスの中で、プロセスそのものして今日もまた作曲実践を行っていく。フローニンゲン:2019/12/18(水)

07:05

### 5357. 今朝方の印象的な夢

時刻は午前7時を迎えた。起床から相変わらず日記をつらつらと綴っている自分がいる。それが静寂さという自分の望むことであれば、それはそれでいいのだと思う。それもまた静寂さに則った生き方である。

今朝方の夢は、随分と印象に残るものだった。目覚めた時、なぜか私は不思議な帰還感覚があり、そこは今から10年、あるいは20年先の世界のように思えた。宇宙の遠い惑星のどこかから帰ってきたかのような感覚があった。言わずもがな、それは物理的に遠くから帰ってきたという感覚だけではなく、自己の存在として遠くの自己から自己の近くに帰ってきた感覚があったのである。

夢の中で私は、未だかつて訪れたことのないリゾート地にいた。そこは島になっており、雰囲気としてはインドネシアのバリ島のようなイメージだった。南国にある木々が海岸沿いに生い茂っており、太陽の光によって温められた暖かい風がそれらの木々の枝や葉を揺らしていた。

---

---

そもそも私がこの島にやってきたのは、小中高時代から付き合いのある親友(SI)の結婚式に参加するためだった。彼からの招待を受けた時、こうしたリゾート地的な島で結婚式を行うことを驚いたが、到着してすぐに、ここに来て良かったと思った。

結婚式場に到着すると、私はトイレに行きたくなったので、トイレに立ち寄ることにした。結婚式場はとても豪勢であり、清潔感に溢れていたのだが、なぜかトイレが実際に通っていた中学校のトイレのように汚かった。私の時代にはまだ和式トイレが残っていて、そこも全てが和式トイレだった。とはいえ、私は用を足すだけだったので、和式トイレの個室に入る必要はなかったのだが、そうしたトイレの姿が少し懐かしく思えたのだ。

用を足し終えてトイレから出ようとする、そこで小中学校時代の友人(MS)と出会った。どうやら彼も結婚式に招待されたらしく、式が始まる前に用を足そうという考えを持っていたようだった。すると彼は突然、「今からトイレ掃除をしよう」と述べた。それは私に対する提案というよりも、強制的に私も手伝えというニュアンスが含まれていた。

彼はすぐさまブラシを持って和式トイレを磨き始め、彼の提案を断れる雰囲気ではなかったので、私もトイレ掃除をすることにした。すると、時間が移動し、どうやら結婚式を終えて、その場で二次会が始まろうとしていた。

二次会では、新郎新婦の幼少時代の思い出を巨大なスクリーンに映し出すようなことが企画されていた。ちょうど私の友人(YU)がそれを担当しているようであり、彼がスクリーンの前に立っていた。また、彼の横には新郎もいて、2人で何かを話していた。すると再び、ここでも時間が途切れ、時間がいつの間にか推移していた。気がつくとは私は、親友である新郎の目に蹴りを2回入れていたようだった。彼が机の下に潜り込んでいるときに、かかとで彼の両目を2回ほど蹴り込んだようなのだ。

どういわけかその時の私は憤怒の感情の中において、そうした行為を行っていたようだった。改めて我に返った時、それによって彼が失明してしまうのではないかと私は恐れたが、彼はなんとか無事のようなのだ。しかし、その痛みがひどいらしく、彼は地面に伏す形で眠りの世界に入っていた。すやすやと眠る彼の姿を眺めていると、安堵の念が生まれた。

---

すると、実は私が暴行を加えたのは新郎の彼だけではなく、スクリーンの前に立っていた友人に対してもだったようだ。その友人に対しては、蹴りではなく、拳で顔面を殴りつけたようだった。彼もまた無事のようにあり、私は一安心したが、時間が飛んだその間に、いったい私は何をしたのだろうかと思った。また、何がそれほどまでに自分を怒らせたのかを少し考えていた。そして、我を忘れることの怖さ、あるいは自分が自分ではない制御不能の者に突如として変貌してしまうことに対しても恐ろしさを感じていた。

そこから私は式場から出て、一人になりたいと思った。一人になって、心を落ち着かせる必要があると感じたのである。すると式場の近くに、木造の家屋があり、私はそこに入った。そこは宿泊用の家屋であり、実際に私たちが宿泊している場所のようだった。私はその一軒家のような木造建築の家の中で一人になった。とはいえ、そこには何人かの友人たちと一緒に宿泊しているようだったから、彼らに見つからないように、私はロフトの方に向かっていった。

ロフトに上がってみると、その上に隠された屋根裏部屋のようなものがあることに気づいた。「これは運がいい」と私は思い、その屋根裏部屋に逃げ隠れるようにして、そこでしばらく時間を過ごそうと思った。

しばらくすると、何人かの友人たちが帰ってきた。向こう側から見えない床板を通して、屋根裏部屋から彼らの様子を眺めていると、彼らは私を探しているようだった。私は彼らに見つかることはないと思っていたが、小中高時代の女性友達(KF)が私が屋根裏部屋にいることに気づいた。気づかれてしまったのもう隠れていてもしょうがないと思い、私は一階に降りた。

すると、そこでもまた時間が一気に推移した。どうやら結婚式も二次会も終わり、島を離れる日がやってきたようだった。島を離れるためにはフェリーに乗る必要があった。そこにはまるで大きな駅のように、行先の様々なフェリーが停まる立派な船着場があった。

如何せん様々な目的地へのフェリーがあるものだから、間違っただけのものに乗らないようにする必要があった。私たちはフランスのマルセイユかどこかを經由する形で自分たちの目的地に帰ることになっていた。目的地は明確なのだが、その船着場がやはり複雑であったから、なかなか目的の船を見つけることができなかった。

---

私は、結婚式場で暴行を加えた親友2人と一緒に船を探しており、次々と船が出発していく姿を見て、意を決して目の前の船に飛び乗ることにした。制服を着て、顎髭を生やした船長らしきフランス人男性が船内にいたので、その男性に話しかけ、目的地に到着するかどうかを確認したところ、目的地に到着するとのことだったので、私たちは一安心した。

するとまたしても時間が推移しており、私は空を飛んでいた。厳密には、時間が逆行する形で、私はまだその島にいて、島の海岸線の上を飛んでいたのである。さらに厳密に言えば、私は結婚式が行われた宮殿のような場所で、数人の友人と口論しており、それに嫌気がさして宮殿の中庭から空に向かって飛び出したようだった。

海岸線の上空をしばらく飛んでいると、下から何かの動物の鳴き声が聞こえてきた。見ると、なんとそこには猪の大群がいて、小さな子供の猪が鳴き声を上げていたのである。猪たちの数は尋常ではないほどに多く、彼らは海の浅瀬の中を歩いており、これから別の島に向かって大移動を行っているようだった。上空から猪たちの力強い足取りを眺めていると、こちらにも力が湧いてくるかのような感覚だった。また、小さな猪たちの姿も可愛らしく、それは私の心を多いくつろがせてくれた。

彼らの進む方向と合わせる形で空を飛び、彼らの移動風景を見ていると、ある時突然、猪たちが全員巨大化した。それは本当に尋常ではない大きさになった。しかも、大きさだけではなく、凶暴性も増したようであり、彼らが浅瀬からジャンプすれば、空を飛んでいる私に届きそうであり、私は食べられてしまうか殺されてしまうかを恐れた。

一頭の猪がジャンプした時、本当に自分の足に届きそうだったので、これはまずいと思い、私は高度をさらに上げて飛ぶことにした。すると猪たちはまた穏やかな表情に戻っていった。だがそこから突然、猪の大群たちは、人食巨人に変化したのである。彼らの姿形は人間であり、彼らの知性は人間と同等かそれ以上であった。

何人かの巨人が、経済学の話をしているのが聞こえてきて、若い巨人たちはどうやら大学のようなものに通っているらしかった。彼らは人間を食べてしまうが、普段は大人しく、必要に迫られない限りは人間に危害を加えてこない。とは言え、私は彼らの存在がおっかなかったので、彼らに捕まらな

---

いように、さらに高度を上げようとした。ところが、それ以上高度が上がらず、下手をすると彼らがジャンプをすれば手が届きそうな場所を飛んで移動することになった。

こちらの島から別の島にかけて、無数の巨人たちが浅瀬を行進する光景は圧巻であった。向こうの島に夕日が暮れかかっており、夕日に照らされた島と海、そして巨人たちの歩く姿に目を奪われたところで、再び時間が跳躍した。

最後の夢の場面は、再びそのリゾート地が舞台となっていた。島を取り囲む海岸の近くに、海を眺めることのできる吹き抜けのカフェがあった。カフェでしばらくゆっくりしようと思っていたところ、大学時代に第二外国語で同じクラスだった友人がカフェにやってきた。彼は現在弁護士をしており、いくつかの専門領域の法律にかなり精通している。

先日偶然ながら、私が出版した書籍を彼が紹介してくれることになり、紹介文を書いてもらった。ところがその紹介文が散々たる出来であり、読者を混乱させるような内容になっていた。その紹介文はオンライン上で読めるようになっており、読者からコメントがもらえるようにもなっていた。大抵の読者は、「書籍の内容と全く違うことが書かれている。これでは読者を混乱させるだけだ」というような趣旨のコメントをしていた。私もそのように思い、彼に紹介文を依頼しておきながら恐縮であるが、彼の紹介文に手直しを加えた。いくつかの項目のうち、ある一つの項目の文章だけが酷かったので、そこだけ修正することにしたのである。

そんなことが先日にあったと思い出しながら、私はカフェで彼と話をしていた。ちょうどその件について話をするタイミングあったので、彼のことを気遣いながら、さりげなくその話題を持ち出した。すると、彼は全くそれに気づいておらず、また悪気は一切なかったとのことだった。むしろ彼は、私の書籍を紹介してくれるために特別な会社を設立してくれていたようだった。しかも彼は借金をして、その会社を作ったそうだった。

会社設立に要した費用は50万ぐらいかと私は見積もっていたのだが、聞いてみるとなんと、1000億円ぐらいの借金をして設立したそうだ。設立費用がそのような金額になるとは考えられず、もう少し話を伺ってみると、彼は投資会社を設立していたようであり、膨大な金額の借金を元手に、巨大な金額のお金を運用していたらしい。

---

どのようなスキームで投資を行っているのかさらに突っ込んだ話を聞いてみたところ、それは法律の抜け穴を掻い潜るような、かなりグレーなスキームだった。見方によっては、それはもう詐欺的な手法のように私には思えた。とは言え、そのスキームには彼の高度な知性が反映されていたし、そのスキーム自体に面白さがあったのは確かである。実際私はその場で思わず、「面白い！」と大きな声を上げていた。そのような手法を思いつく彼に対して、好感が増したところ、後ろから2人の女性が声をかけてきた。振り返ると、そこには小中学校時代の女性友達(KF & NI)がいて、「で、加藤のスキームはどんなものなの？」とニタニタした笑顔を浮かべて尋ねてきた。

2人の表情を見たとき、私が行っていることも彼女たちから見ればグレーなことのように映っているのだと思えた。特に私は投資会社を運営しているわけではなかったのに、何もグレーなことはしていないと説明しようと思ったところで夢から覚めた。今朝方の夢の中では、特に大切な親友に暴行を加えたシーンが印象に残っている。おそらくそれと関連して、巨大化した猪の大群や巨人の大群のシンボルがあるのだと思う。

自分の中に潜んでいる我を忘れさせるほどの巨大な暴力性と破壊衝動については、もう少し角度を変え、時間をかけながら探求していく必要があるようだ。今から少し、一昨日にゼミナールの受講者の方々に共有したドリームディクショナリーを使って、猪のシンボルについて調べてみようと思う。

フローニンゲン:2019/12/18(水)08:34

### 5358. 儂さと永遠の充満する世界の中で

時刻は午後の7時を迎えた。つい先ほど、静寂さを楽しみながら夕食を味わって食べた。

ここ数日間、静寂さについて色々と考え、日記にも書き留めていたように、静寂さと一体となってこの世界に接している自己がいる。それは先ほどの夕食だけではなく、今日は朝から晩までそのような形で活動に営むことができていた。

朝にコーヒー豆を挽き、その香りを楽しんでいるときに、絶え間ない儂さの中を自分は生きていることにはたと気付かされた。目の前で立ち込めているコーヒーのアロマもまた儂く、その芳ばしい香りを味わっている時間もまた儂い刹那的なものである。それはもう、香りや時間だけではなく、目に映

---

る光景にも当てはまることであり、聞こえてくる音もまたそうだ。私たちは儂さの充満する世界の中で生きている。それを改めて実感した。

この世界に充満する一つ一つの儂さを味わっている体験や感覚、そして気持ちそのものも儂いものである。世界は本当に儂さで出来ているようなのだ。そして私たちの自己も人生もまた儂さで出来ているのだ。全てが儂さで出来ていると考えてみると、そこから一転して、全てものが永遠を体現しているようにも思えてくる。連続的かつ永続的な儂さ。全ては現れては消えていく儂さを持っているのだが、それは即永遠を意味している。そのような考えが浮かんでいた。

今日はいつもに比べて、ちょっぴり濃い目のコーヒーを味わっていた。ドリップ用の入れ物にいつもより濃い目のコーヒーを注いだ時、その色の鮮やかさに息を呑んだ。コーヒーがいつもより輝きを増しているように思えたのである。気持ち多く豆を挽いている時、そして挽いた豆をドリップしている時、こうした手作りのコーヒーを大切な人に振る舞いたい気持ちになった。そのような出来事が今朝方にあった。

本日は、午前中に一件と午後一件、オンラインミーティングを行った。午前中のミーティングの中で落語の話題が挙がり、協働者の方から大阪にある天満天神繁昌亭について教えてもらった。落語は大学時代の時によく聞いており、今もまだ関心があり、今度一時帰国して大阪に滞在する際には、ぜひそこで落語を聞いてみたいと思う。これでまた、来年の一時帰国の楽しみが増えた。

今夜もまた静寂さを味わい、明日も静寂さを味わえるように祈りながら就寝しよう。就寝前には、小さな美術館としての書齋の壁に飾られた2枚の原画を眺めよう。ニッサン・インゲル先生がお描きになられた2枚の原画には、独特な存在エネルギーがある。そこからは、複製のデジタル画などにはないエネルギーが迸っている。

これは絵画作品のみならず、文章でも同じなのかもしれない。例えば、肉筆の手紙が持つ温かさとその存在エネルギーを考えてみれば、原画や直筆の力にすぐに気づくだろう。静けさに浸り、自分の内側の静寂さと一体となりながら、インゲル先生の作品を眺める形で今夜は就寝しよう。フローニンゲン:2019/12/18(水) 19:18



今朝は午前3時半過ぎに起床した。実際には、それよりも早く目覚めていたのだが、最初に目覚めた時間があまりにも早く、午前0時を迎えたばかりの頃だった。その時にもすでに身体が全快しているような感覚があり、ほんの数時間の睡眠で身体が回復するようになっていることは驚くばかりである。今日はそうした時間には起床しなかったが、明日からはひよっとすると、それくらいの時間に起床してしまってもいいかもしれないと思う。そうした時間に起床して、また午前中に必要であれば仮眠を取ればいいだけの話である。

今日は早速、今朝方の夢について振り返っておこうかと思う。夢の中で私は、どこの国ともわからないような場所にいた。あえてどの場所に一番近いかと言えば、パリ郊外のラヴェルの家があった小さな街に近いと言えるだろうか。そこで私は、元日本代表のサッカー選手(HN)の実家を訪れていた。そのサッカー選手本人はそこにはおらず、私はご両親と話をしていた。

2人から聞いていたのは、どのような教育方針でその選手を育ててきたのかということだった。ご両親の話を聞いているとすぐに、うちの両親の教育方針と同じであることがわかった。何をするにも子供の意思を尊重し、好きなことをやらせてあげ、その姿を見守るという教育方針を持っているようだった。そして、子供の意思を単に尊重するだけではなく、それを育むという点にも配慮されておられた点が素晴らしいと思った。

そこからもしばらくお二人から話を伺っていた。すると夢の場面が変わり、私はおそらくその国の、湖が近くにある場所にいた。湖近辺を走るバスの中に私はいて、バスの窓から空を眺めると、晴れわたる空にハングライダーを楽しむ数名の人たちの姿を見た。それは通常のハングライダーの高度よりも随分と高いところを飛んでいた。清々しい青空をあのように飛ぶことは、さぞかし気持ちいいだろうと思った。私もいつかハングライダーか何かを使って、あのように大空を飛びたいと思った。

バスの中を見渡すと、ちょうど私の左隣に、小中学校時代の女性友達(AS)がいた。彼女に話しかけ、色々と話を聞いてみると、彼女もオランダで生活をしていることを知った。オランダに戻ったら、カフェかどこかでまたゆっくり話をしようということになった。

---

バスはゆっくりと走っており、どうやらこのバスは空港に向かっているようだった。私が座っている前の座席には、小中学校時代の友人(MS)がいて、彼が私のスーツケースを預かってくれていた。どういうわけか、彼はもう1人別の友人のスーツケースも預かっていた。そのため、彼の横の座席にはスーツケースの山ができていた。

改めて彼にも少し話しかけてみようと思って前の座席に行こうとしたところ、隣に座っていた女性友達から、「どこからか音楽が漏れて聞こえてこない？」と尋ねられた。私もそれが気になっており、どうやら一番前の座席に座っているアフリカ系の女性のイヤホンから音が漏れているようだった。前の座席の友人に声をかけるついでに、私はその女性に音が漏れていることを伝えようと思った。すると、いつの間にやら私たちは空港に到着していた。

その空港は、先ほどバスの中から見えていた湖の近くにあった。離着陸する飛行機たちは、湖を滑走路代わりに使っていた。離着陸の際に、湖の水を弾き姿はどこか美しく、その光景に見入っている自分がいた。私は自分が乗る飛行機のゲートに向かおうとし、ちょうど近くに大学時代の先輩がいて、その先輩が携帯を開き、アプリを立ち上げて、ゲートまでの地図を表示させようとしていた。私は先輩と二、三言葉を交わし、一緒に搭乗ゲートに向かった。フローニンゲン:2019/12/19(木)  
04:32

### 5360. ウェブブラウザの変更による心の軽さ

時刻は午前6時半を過ぎた。今日はまだ平日の木曜日だが、あたかも休日であるかのような静けさが広がっている。今日もまたとても静かな心を持って、自分の取り組みに打ち込めそうである。

ひょんなことからウェブブラウザをBraveに変えてみたところ、このブラウザの特徴である広告の遮断機能のおかげで、ブラウザが軽くなったと感じるだけではなく、心が軽くなった気がする。これまで広告によってどれだけ心を重たくさせられていたかを知る。

インターネットがこれだけ普及した時代において、それと賢く付き合うことは重要であり、極力ネットの世界とつながらないようにすることも大切だろう。一方で、様々な調査をする上では、やはりネットの力は有益であり、そうした際に広告などによって集中力が削がれてしまうことは大きな問題であった。ネット上にも優れた文章や有益な情報はきちんと存在しており、それを腰を据えて読む場合

---

に、意識を背けさせる広告はなんとかならないかと思っていたところ、このブラウザーと出会った。これまで使っていたSafariやGoogle Chromeよりも圧倒的に軽く快適である。そのようなことを改めて先ほど実感していた。

午前6時半を迎えるまでに、作曲の準備運動がてら4曲を作った。これからまた作曲実践に取り掛かる。ひたすらに内的感覚を音の形にしていく鍛錬を継続させていく。それはもはや鍛錬という言葉では言い表せないようなものになってきている。それは自然な呼吸であり、心臓の運動と同じような類だと思われる。

心臓を動かすように、呼吸をするように作曲をしていくこと。結果として生まれる音の姿に囚われることなく、自分がその日その瞬間に生きたという証を音として形に残していく。それを今からまた行う。そして今日1日を通してそれを絶えず行っていく。

現在、曲を作り終えた後に、楽譜上に色の名前を明記するようにしている。これは曲によって喚起された色である。このように色を明記しておく、まるで音で絵を描いているかのような感覚にふと陥る。音と絵は本当に深く結びついているのだ。音が存在するところには色が存在し、色が存在するところには音が存在する。そのような形でこの世界を眺め、感じている。

音と色に溢れた世界。そうした世界を根底から支える静寂さ。音も色もそのような静寂さから湧出していることが見えてくる。万物の根元は静寂さなのだろうか。そのようなことを、この明け方の朝に思う。フローニンゲン:2019/12/19(木)06:53